# 精霊世界　～二人の少年～

神羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
精霊世界　～二人の少年～

【Ｎコード】
Ｎ８８５８Ｅ

【作者名】
神羅

【あらすじ】
精霊と人類が共存する世界での物語。片方の少年は復讐の為に…。もう片方はもっと小さかった頃に一度だけ出会った精霊に再び会う為に…。そんな二人の少年の物語……

## プロローグ（前書き）

後書きに大事なことが書いてあります。

# プロローグ

――――――この世界は、昔一度滅びかけた。
人類の科学力が発展しすぎたせいである。
この惑星…この星の環境の事を考えず、新技術開発の為に環境を破壊し、
恐ろしいまでの勢いで進む温暖化の対策を何もしなかったからだ。
そして、この星が温暖化に耐えられなくなり、世界各国で異常が発生した。
強力すぎる酸性雨。大規模な地震。地震と同時に地割れ。
住める場所が少なくなった人類は焦りを覚えた。
世界各国のトップが協力し、環境問題の解決、石油等に次ぐ新エネルギーの開発、
そして、今後どうやって生き延びるかを考えた。
しかし、間に合わなかった。
三ヶ月以上も雨が続き、人の住める場所がますます減った。
そして、人類の全てが絶望した。
「この星の最後が来た」と。
しかしその時、一つの救いの手が差し伸べられた。
自らを精霊、と言う七色に光り輝く女神が降臨し、
この星の環境をあるべき姿に戻したのだ。
そして同時に、人類全ての記憶から進みすぎた化学の記憶を消した。
そしてその時、女神はこう言ったという。
『今度は私たちが力を貸します。もう一度この星で生きましょう』…と――――

そして時は数千年が経ち、世界には精霊がいて当たり前の世界になった。

これは、その時代の二人の少年の物語である。

## プロローグ（後書き）

今回始めたこの小説『精霊世界　～二人の少年～』は完っっっっっ壁に不定期更新です。
ですから、連載が止まっても不満等は言わないで下さい。お願いします。
空の上！？の方は連載再開しますのでこちらは連載が止まったら不満を言って下さっても構いません。ご期待に沿えるように頑張ります。
それでは、今後ともよろしくお願いします。

## ハイト　第一話

――ゴォォォォォォ…パチッ…パチッ

辺り一面が燃えている…。
ここは何処かの事故現場だろうか。
元の形が何だったのかが分からないほどぐしゃぐしゃになった金属片。
点在する元は人だった物。その周りに溜まっている血液。
そして…倒れている、少年。
少年は、辛うじて生きているようだ。胸が微かに上下している。
しかし…、あの怪我では長くは持たないだろう。
胸や脇腹、両の足に金属片が突き刺さっているのだ。

「僕…死んじゃうのかなぁ…」

少年は一人呟き、口内から大量の血液を吐いた。

「おとーさん…おかーさん…ごめんね…」

生きる事を諦め、少年は目を閉じた。
少年が目を閉じて数秒、一人の精霊がこの事故現場に飛んできた。

「……。……！」

精霊の力によって少年の傷が癒されていく。
つい先ほどまで青かった顔色もだんだんよくなっていく。

「……ぁ」

少年が一瞬意識を取り戻した時に見えたのは、一人の、男の精霊だった。

――――――――――――――――――――――――

「この夢か…」

あの時の少年――名前はハイト・ローレン、と言う――は目を覚ました。
今の時間は明朝。まだ外が青い。
は窓を開けて新鮮な空気を部屋に取り入れ、自分のベッドから降りて着替え始めた。
てきぱきと寝ていた時の服を脱ぎ、自宅であるローレン焼きたてパン工房の制服を引っ張り出す。

「…あの時、僕を助けたあの精霊は何だったんだろう…」

制服を着終え、最後にエプロンをつけて着替えが終了。ちなみに若い子だから、とエプロンの色は派手めな赤色。所々に焼きたてのパンの絵がついている。そして右下にはでかでかとローレン焼きたてパン工房、と書かれている。

「早く起きすぎちゃったなぁ…。まだパンを作り始めるには早いし」

ハイト・ローレン、齢１２歳。元々手先が器用なため、プロ顔負けのパン作りの腕を持つ。
まぁ、それはさておき、
「おや、おはようハイト。今日は早いね。眠れなかったのかい？」
「おはようございます、おじさん」

「ははっ、いい加減父さんかお父さんって呼んでよ。ハイトにお父さんって言われるのは私のさり気無い夢なんだよ？」

おじさん――クライム・ローレン――はハイトの養父である。
七年前のあの日の翌日、小麦粉の買出しに出ていたクライムが近道と称して路地裏を歩いていた時に路地の片隅に倒れていたハイトを見つけたのだ。その時のハイトは服には血がつき、目だった怪我は無いが体中がボロボロだった。倒れているハイト背負い自宅へと連れ帰り、クライムが付きっ切りで看病した。その看病のかいがあって目を覚ましたハイトに対し、開口一番『ねぇ君、僕達の子供にならないかい？』と言ったのだ。
勿論当時のハイトは意味をあまり理解していなかったがこれを受け入れ、現在に至る。

「まぁいいか、気長に待つよ。ハイトがお父さんって呼んでくれるまで。
さぁ、家の女将が起きる前にちゃっちゃとかまどの用意をしようか。ハイト、手伝ってください」
「遅かったね。もう起きてるよ」
「うげっ」
「自分の嫁に対して、『うげっ』は無いんじゃないかい？」
「うわぁぁ、ヴィエラごめん、ごめんってば」

クライムの背後から出てきた養母――ヴィエラ・ローレン――とクライムのやり取りをハイトは苦笑しつつ眺める。ちなみに、今はクライムがヴィエラに足を踏まれている（しかもグリグリされながら）。

「ほら、ハイトにクライム。さっさと開店準備するよ。もう一時間もすればコーヒー目当ての常連さんが来るんだから」

「はいはい」
「分かりました」
返事をしてから本格的な開店準備を始める。
店内の掃除、テーブルの拭き掃除、かまどの点火、パン作り…その他諸々。
一通り終わったところで開店時間を迎えた。

「ハイト、ちょっといいかな？」
「何ですか？おじさん」
「一つ話しておきたい事があってね。
…実はね、ハイトの学校のことなんだ。ハイトの体ももう完治しているでしょう？同年代の子達とも遊びたいだろうし…、それに、私は知っているんだ。ハイトが自分の小遣いを使って精霊の勉強をしていることを。そこで、私は友人の経営している精霊学校に連絡してみたんだ。そしたら彼は快く引き受けてくれた」
「そんな…、精霊のことは趣味で勉強してるだけで…。それに…僕がここを出て行ったらおじさんとおばさんはどうするんです？二人じゃ経営も辛いでしょう？」
「ここの事なら大丈夫です。それに貴方は…もう一度会いたいんでしょう？
自分を助けてくれたという精霊に」
「……」
「だったら私たちのことはいいから、行きなさい。若いうちは親の言うことを聞くもんですよ？」
「……ありがとうございます、おじさ…いや、お父さん。僕、その学校に行きます」
「分かってくれたんならいいですよ。それに…『お父さん』えへへへ〜〜〜」

（そっか、おじさ…お父さんは知ってたのか…僕の夢があの精霊にもう一度会う事だって。学校にも入れてくれたんだから、頑張るしか無いかな）

ハイトはクライムに感謝した。だが、すぐに学校ってどんな学校なんだろう？とか、友達できるかな？という思考に切り替わった為、感謝した時間は僅か数秒。だがクライムはこの事に気づくことはなかった。

「つまり次からはハイト君のパンは食べられないのか！？っていうかそれよりもハイト君の可愛らしい姿を見ることが出来なくなるのかぁ！？」

「おぉう…今回はずいぶんと突然の出現ですねクエン」

「あ、おはようございますクエンさん」

いきなり現れた変人…もといクライムの友人でありここ、ローレン焼き立てパン工房の常連でもあるクエン。常連になった理由が自分の息子よりも可愛い（クエン談）ハイトを一日一回は必ず見るため、という変態さんなのだ。

「ハイト君いないんならここに来る理由もなくなるなぁ…」

「貴方は何をしにここに来てるんですか？

…パンを買いなさいパンを」

「ハイト君を見に来ているに決まってるじゃないか。それ以外にこの店に来る必要は無い！」

「ほぉう、そうですかそうですか。じゃあハイトを見に来る度に飲んでいるコーヒー代と散々貸した私のお金、それに今までつけておいたパン代、更に今までに割ったコーヒーカップ等々の代金を全額払っていただきましょうか」

「…ぜぜぜ…ゼロの数は、い…いい、いくつだい？」
「限りなく六つに近い五つです」
「…っ！！？…今後ともここに来てあげようじゃないか。僕と君の仲だものな」
「だったらまた宣伝でもして下さい。貴方は仕事の都合で首都のほうによく行きますからね」
「オーケェィ！任せろぉ！」

二人が言い合いをしている間にパンが焦げたのは敢えて言うまい。…そして焦げたパンを見つけたヴィエラがそのパンを二人の口に捻じ込んで全てのパン代を二人から取ったのも敢えて言うまい。

そして、売れ行きも上々で特に問題も起こらずに（最初のパンは焦げてしまったが）午前が過ぎていった。
まぁ、常連の客が口々に
「ハイト君どこかいっちゃうのかい？」
とか、
「ちゃんと戻ってくるんだろうね～」
とかは言っていたが、ハイトは苦笑で誤魔化すしかなかった。

「いやぁ…ハイト君かーわいいなぁもう」
「いい加減帰りなさいクエン。この、パンだったものは袋に入れてあげますから持ち帰りの方向で」
「げっ…僕がかい？」

## ハイト　第一話（後書き）

どうも、神羅です。慣れない書き方に挑戦してみました。読み辛かったら言って下さい。何とか読みやすくなるように頑張って編集しますので。
それでは、不定期ですがこの小説も宜しくお願いします。

# ”ザナフ”　第一話

〜7年前〜

――ゴォォォォォォ…パチッ…パチッ

辺り一面が燃えている…。
ここは何処かの事故現場だろうか。
元の形が何だったのかが分からないほどぐしゃぐしゃになった金属片。
点在する元は人だった物。その周りに溜まっている血液。
そして…奇跡的に大きな怪我も無く、意識もある状態で呆然とこの惨状を眺めている少年。
……少年は何を思ったのだろうか。
自分の近くで死に掛けていた親友のもとに歩いてゆき、その身体を揺すった。

「なぁ…キリク。返事…してくれよぉ…」

なぁ…、なぁ…と少年は親友の身体を揺すり続ける。
数十秒揺すっただろうか。
キリクは数秒だけ、意識を取り戻した。

「…カフッ…。悪いな、俺は…多分…駄目だ…。お前…は…怪我は…無い…な」
「…キリクぅ…」
「よかっ…た。お…れの友…達はちゃん…と、お前を…助け…てくれたの…か」

少しずつ、目が虚ろになっていくキリク。既に少年すら見えていないのだろう。
もう、死がすぐそこまで来ているようだ。

「…でも…消えちゃったか…。ゲホッ！カハッ！」

口から血液を大量に吐き出すキリク。

「…ははっ…また会うときも…俺たち…親友が…いいなぁ。…じゃ…また…なぁ」
「キリク…？キリクぅ…？」

キリクは目を閉じ、静かに息を引き取った。
少年はそれでも親友だった物を揺すり続ける。
…しかし、親友の事だけを考えていて、自分の上に崩れ落ちてくる瓦礫に、少年は気がつかなかった。
――いや、気づけなかった。
後頭部を強打し、親友の亡骸の上に倒れ、意識が混濁する。

「……ハッ、ハッハッハッハ、ハーーーッハッハッハッハッ！」

そして…意識を失う直前に見た物が、一人の精霊が空から降りてきて高笑いしている所だった。

――――――――――――――――――――

「……ッ！」

あの時の少年――今は”ザナフ”と名乗っている――はベッドから

飛び起きた。
そのまま、ベッドから降りて壁に近づく。
そして、傷のついた拳を振り上げ――

「…クソッタレがぁッ！！」

――叫びながら、拳と同じように、何年も殴られ続けて傷ついた壁を全力で殴った。

「…ハァッ…ハァッ…」

乱れた呼吸を整え、必死についさっき見た悪夢を忘れようと努力する。
しかし、七年間殆ど毎日見ている夢だから忘れられない。
この夢のせいで今日もまた、彼は不機嫌に一日を過ごすのだ。

「…ちっ、そういや今日から学校か…」

一人呟くと、先日ザナフの家に送られてきた制服、メヘルニーズ精霊学院の制服を引っ張り出し、別段格好良くもなく、かといってダサいかと言われればそうでもないふつーの制服に着替える。
そして、自室からリビングに行き、買い溜めしておいた腹が膨れるだけで特に味の無い携帯食と野菜ジュースを腹に入れ、家を出る準備が終わる。

学院に向かって歩いている最中、ふと忘れ物に気づいた。

（…アイツ持ってくるの忘れたな…取りにいくのもメンドクセーから今日はいいか）

――気づいたのだが、そのまま歩いて行ってしまった。

## ”ザナフ”　第一話（後書き）

どうも、神羅です。
慣れない書き方にも幾分か慣れてきました。
それはさておき、
本作の裏の主人公”ザナフ”編第一話をお送りいたします。こちらはハイト編とは違い、ダークな風味にしていこうと思っております。
空の上！？の方もきちんと更新しますんで今後も宜しくお願いします。

# 第一章　学園編

七年前のあの事件…。
あの事件での生存者の二人の少年は目的と場所は違えど同じ精霊学院に入学した。

ハイトは自分を助けた男の精霊にもう一度会う為に。
”ザナフ”はあの事件の犯人であろう男の精霊に復讐する為に。

だが、
6～7年前から発生し始めた精霊の暴走。
それによる全世界の学院の授業内容の変化。
様々な障害が少年達に襲い掛かる。
これらは全て、あの事件と関係があるのだろうか？

二人の少年は学院に行く。
それぞれの目的を果たす為に。

ハイトと”ザナフ”は目的を果たすことが出来るのだろうか？
第一章、学園編。
……スタート

【文字数が…足りないだと…！？】
【と、言うわけで作者が個人的にどんな内容になるのかお教えします。多少…ほんの少しですがネタバレになります】
【それでもいいさ、という人だけ読んでください】
【というか読んでください。お願いします】

【それでは、ほんの少ぉしだけネタバレを】
【ハイト君…クラスのお姉さん方にえらく気に入られてしまいます。年下＋低身長＋僕ですし】
【”ザナフ”…初っ端からサボります。えぇ、彼は精霊が大ッ嫌いですし。でもそこにある人物が…】
【次、精霊の呼び方です。呼び方にも複数あります。今考えている物でも５つ程あります】
【ですが、本格的に精霊の話に入るにはまだ時間が掛かりそうなのでその間、『こんなのはどうだろう？』という斬新な方法を募集してみようと思います】
【どうか皆さん、面白い召喚方法が思い浮かんだらメッセージでも評価でも何でも良いので教えてください。お願いします】
【それでは、今後もこの小説を宜しくお願いします】

## 第一章　学園編（後書き）

そう言うわけなので今後もこの不定期更新な小説を宜しくお願いします

## ”ザナフ”　学園編第一話

自宅を後にし、学院に向かって歩くこと暫く、彼が学院に着いたのは入学式約五分前だった。
校門や校舎の入り口には既に人はいない。
皆、入学式へ向かったようだ。

精霊の勉強の為に何かに…。
ザナフはそう思ったが声には出さず、入り口に貼り出してあるクラス分けの紙を眺めた。

１―Ｃ

クラスを確認し終えると、その横に貼ってある予定表を確認する。

『入学式…精霊による歓迎会。終わり次第、各クラスへと移動
ＬＨＲ…各クラス担任による学院の基本的な規則の確認、委員会決め等々
早くに確認等が終了した場合、生徒達の自由な時間とする
授　業…午後より早速授業が始まる
学院と精霊による、本格新入生歓迎パーティ
…任意参加。しかし、始まるまでは学内にいること。それ以降は生徒各自自由解散』

精霊なんかに歓迎してもらいたくねぇ。
こうなったらやることは一つ。
「よし、」
そう、たった一つ。

…して、そのやること、とは？
――それは勿論、
「サボるか」
サボタージュ、である。

一人でサボり宣言をした直後、後頭部に衝撃が走った。
それほど痛くは無かったのだが、いきなりだったので驚いた。
振り向いてみると、そこには一人の女生徒が立っていた。

「ほうほう…、初っ端からサボる新入生がいるのか。やれやれ…ほら、さっさと行くぞ、私について来い」

冗談じゃない。
こっちはもうサボる気満々なんだ。
ＬＨＲと授業だけ出て後はサボるんだ。

「冗談じゃねぇ。行かねぇよ、行きたきゃ一人で勝手に行け」
「駄目だ。行くぞ、新入生」
「行かねぇ」
「行く」
「行かねぇ」
「行く」
「行かねぇ」
「行く」
「行かねぇ」
「フゥ……、分かった。なら無理矢理連れて行くとする。もう時間が無いからな」
「！？」

彼女の纏っている雰囲気が変わった。

先刻(さっき)までの話しかけやすい雰囲気では無い。
気のせいか、彼女の周りに何かの流れの様な物を感じる。

気がついたら制服の後ろ襟を掴まれてズルズルと引きずられていた。
抵抗も試みたが足が痛くなるだけで止まらないので諦め、そのまま
されるがままに会場に向かって引きずられている。

「アンタ、それ何だ？」
「ん？あぁ、これか。これは去年から必修科目になった“魔術”の
応用だ」
「へぇ…。まぁどうでも良い、そろそろ放せ」
「駄目だ、後数分と17秒くらいで入学式の私の出番だ」
「アンタが勝手に行きゃ良いじゃねぇか。俺には関係ない」
「そういう訳にも行かないんだよ。……間に合いそうに無いから近
道するぞ」
「ア？」
「怪我したくなかったら両手足を丸めて出来るだけ小さくなってて」
「うおっ！？」

言うだけいうと、彼女はその場から跳んだ。
校舎の壁や植えてある大きな樹を蹴りながら右へ、左へと。
段々に高度を上げて今はもう屋上を走っている。文字通り、式場へ
一直線に。
当然ながら後ろ襟を掴まれているザナフは首が絞まって大変なこと
になっているのだが、急いでいる彼女はそんなこと気にも留めない。
ただ、目的地に一直線である。

『次は、現生徒会長による新入生歓迎の言葉』

一方、入学式はスムーズに進んでいた。

『生徒会長、どうぞ』

式は次の段階に進む、が、肝心の生徒会長がまだ現れない。

『会長…？生徒の皆さん、少々お待ち…』

――ガシャーーーーーン！

「その必要は無い」

連絡の途中で高い音が響く。
天井の硝子が砕けたのだ。
差し込んでくる日差しが硝子片で乱反射して眩しい。
その中を、一人の女生徒とその手に掴まれた男子生徒が降りて来た。

「まずは新入生諸君。このメヘルニーズ学園に入学、おめでとう。歓迎しよう。私は此処の現生徒会長、…こら、逃げるな。…リエル・フィリサスだ。もう知っているとは思うが、この学園は精霊やそれに関わる物、それと去年から必修科目になった魔術等の勉強や習得が目標だ。…む、だから、逃げるな。…何？上？」

男子生徒に言われ、ちらりと上を確認するリエル。
ふむ、と一つ頷くと視線を新入生に戻し、言葉を続けた。

「新入生諸君、君達にも夢や目標があるだろう。それは良い事だ、目標は高ければ高いほど良い。その目標を現実の物にする為に、この学園にいる五年の間に様々な事を覚えて行って欲しいと思う。で

は、私からは以上だ」

リエルが話を終えると、それと同時に鈍い音が響いた。
魔術で天井をぶち破った時の衝撃で鉄骨が壊れかけていたのだろう。
それが今壊れた。
支えを失った鉄骨は真っ直ぐに彼女の所へ落ちて行く。

「全く…今日は朝からついていないな…」
――パチン！

突如、彼女は指を弾いた。
その瞬間、落ちてきた鉄骨が空中に突然現れた水球に飲み込まれ、
瞬く間に圧縮されてしまった。

「それでは諸君、これで入学式は終了だ。各教室に戻り、勉強に励んで欲しい」

## ”ザナフ”　学園編第一話（後書き）

それでは、ここから本格的に精霊の話にするまでの間、皆さんのアイデアをお待ちしております

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8858e/

精霊世界　～二人の少年～

2010年10月28日07時28分発行